
猫又と俺

青蛙

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又と俺

【Nコード】

N1631V

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

中三で受験生のおれは、お祖母ちゃん家で従兄弟たちと肝試しをすることになる。

あぶれたおれは一人で向かうが、そこには可愛い（自称）の猫妖怪がいたのだった。

おれの運命はいかに…………。

肝試し

「孝之、早く行けよ」

「だ、だって、真は舞だし、櫓は正兄と一緒に。なのに何でおれは一人なんだよっ」

そうだ、ずるいじゃんかとおれが指摘するが。

「だって五人しかいないんだからしょうがないじゃん」と軽く真にいなされた。

「舞を一人で行かすわけには行かないし、櫓はちびっこだしよ」

高校生の正兄が淡々と言うのをいつもは子ども扱いすると激怒する櫓がうんうんと頷きながら正兄のＴシャツの裾を握りしめていた。それがなんとお腹が立つておれは猛然と反撃する。

「知ってるぞ、真は舞のこと……」

「うわああああああああっ」

同じ歳の従兄弟の真が大声で叫び、血相を変えておれに向かって来た。首を押えこまれて窒息しそうになる。

「や、やめろっ、止めねえとぶっ飛ばす」

本格的に戦うつつもりになったおれの耳に真が囁いてきた。

「ほんと、頼むよ。マジで俺さ……」

真のその切羽詰まった感はもしかして真、おまえ。

「マジで？ 舞に告るの？」

こっそり聞くと「うん」と真が頷いた。

そ、そういうことなら協力することはやぶさかじゃない。俺と真は中学三年で、本当なら田舎に帰ってる場合じゃなかった。しかし、田舎の旧家である父方の家には毎年お盆に帰るもの。なんていう悪習が続いている。

中学生にもなれば、田舎なんて結構めんどうなものだ。特にお盆とか、法事とかは遠慮したい日ランキングの一位と二位をあらそう程だ。顔も覚えてないような親戚のおばさんやおじさんにと

つつかまって話の相手をさせられる悲劇が待っている。

だが、それよりもっと嫌なのが誰かが連れて来た『どつかで血が繋がってるらしい子ども』と言う名のガキどもだ。

グズるガキの親は簡単に自分の可愛いこどもをおれに丸投げしやがるのだ。

「まあ、ちゃん、お兄ちゃんに遊んでもらいなさいねえ」

おれのことどこまで知ってたんだよ。おれがもしすっぱー凶悪なやつだったらすんだよ。

嘘だろ……そう思うおれにガキはにやりと不敵な笑いを向けてくるのだ。

「お兄ちゃん、遊んでね」

それからひたすら『どつかで血が繋がってるらしい子ども』さまの奴隷と化すおれ。わがまま放題のガキが帰るまで必死で耐えるしかない。なにしろ正月に会った時の「お年玉」という人質を取られているのだ、仕方ない。

そういう訳で毎年田舎には帰っているわけだが、この先従兄弟同士なんか集まることもどんどん無くなる気がする。前から真が舞のことを好きなのはなんとなく分かっていたので真の気持ちは応援したい。

受験生ってことでまさか今年は無いだろうと思っていたら「どーせ私たちがいなくなったら勉強なんかしないでくせに」と問答無用で両親に車へ連れ込まれた。

そついうわけで今年もおれたちは全員集合してしまったがきつと真には最後のチャンスに思えているのだろう。

だけど、もう会わないのなら今更言っても仕方ないんじゃない？ そつも思っし、肝試しで告るか、ふつー？

ツツコミたいことは数々あれど、まあ真の青春の思い出の手助けになれるのならまあいいかと思っていた昼間のおれに一言言いたい。「おれのバカ野郎」

おれより一つ上の正と三つ下の權は兄弟で俺の親父の兄貴の子ど

もだ。 同じ歳の真は同じく親父の姉貴の子。 舞は親父の妹の子ども……年が近いせいで小さい頃から田舎に帰れば仲良く遊んだ。その五人がなぜこんな懐中電灯の光の届く範囲しか見えないなんという場所に突っ立っているのか。 それは真の言った「肝試し、しようぜ」というあまりにもべたな提案によるものだった。

夏だ、田舎だ、肝試しだ。 なんてあの時あんなに盛り上がったのが謎だが、その時は確かにみんな……おれもノリノリで賛成していた。

だが言っておくがおれはバリバリの都会っ子だ。 夜がこんなに暗いなんて知ってるわけが無い。 今までは夜はみんなで夜通しトランプなんかをやってたせいで田舎の夜を見くびっていた。

家の農機具が置いてある納屋の前から続く細い道を歩いていくと道が三本に別れている。

その先にそれぞれお地蔵様の祠があつて、昼間、家にあつた割り箸の刺さったナスビだのキュウリだの持ってきて祠に置いていた。それを取ってくればいいルール。 簡単だ。 家の敷地からそんなに歩くわけじゃないし、取ってくるのもナスビか、キュウリだ。

そう思っていた。 簡単だつて……そりゃ昼間ならな。

「真っ暗だな」

「おお……」

「ごくんと誰かが唾を飲み込む音が聞こえてなんだか雰囲気満点になつてきていた。」

「行こうか、舞」

「う、うん」

びびりまくったはずの真がぐつと懐中電灯を前に突き出し、反対の手を舞に差し出した。

おおっ、やるじゃん、真。

しっかりと手を握り合つた二人が歩き出す。 ああ……あれが世に言う『吊り橋効果』ってやつ。 案外上手くいくかもななんだかほっこりしながら二人の背中を見送つて。 ついでに正兄がセミ

の幼虫と化した櫛を腰にひっ付けたまま歩くのを見て嘔き出した。

「大変だなあ、正兄」

ところが懐中電灯に照らされた光源から出た途端、一瞬で彼らの背中のかき消すように消えてしまった。

笑っていた口が閉じるのを忘れて固まっていた。おれは重大な事に気づく。

「おれ、取り残されてんじゃんっ」

果てしなく真っ暗な中、おれの持った懐中電灯の明かりに二対の目玉が反射した。

あれなんだ？ 狼か？ 虎とかライオンだったりしたら……。あんまりの怖さにここが日本だかサバナだかジャングルなのかも分からなくなっている。

しかしここでみんなの帰りを待つわけにもいかない。本当はそれに諸手を上げて賛成したいんだけど、おれの中にある小さなプライドってやつがそれを許さない。

「くっそ、おれが一番最初に戻ってやる」

とにかく今は何でもいいから目標を作ってそれに向かってがむしやらに進むしかない……。って、マジで受験生みたいなセリフだよな。「あ……みたいなじゃなくて受験生だった」

あやうく迫りくる現実にいきなり潰されそうになる。闇はどこにでもある。例えば受験の闇ってやつ。

うつうつ、自分で言ってへこんでしまった。

落ち込んでる場合じゃない。すんでのところで踏みとどまったおれは、たぶん客観的に見てもすごいへっぴり腰で目的地に向かった。

孤独な生活は独り言が多くなる 名言だ。まさに今のおれだ。おれは今、すっげー孤独で。だからでかい声で独り言を言っても全然おかしくない。

「足に纏わりついているのは変な触手じゃなくってただの葉っぱだよな」

声がやけに響く気がする。

「今顔に触ったのはゾンビじゃない、ただの木の枝だつ。分かってんだよバーロー」

よし、その意気だと自分で鼓舞する。

「そして肩をとんとん叩くのは……叩くのはえつと……なんだ？」
理由が思いつかなくていきなりパニックになりそうになった。

ええとええと……何でもいいから思いつけ、おれ。

「肩叩かれてんだつたら誰かに呼ばれてるんじゃない？」

「ああ、そうか。そうだよな。サンキューって……」

なんでおれ誰かとしゃべってんだ？ そう思った途端に膝がぐらぐらと操り人形のように頼りなくなった。

今の誰？ いや、言わなくていいし。 人間知らないほうがいい
こともあるらしいしな。

ここはきつぱりとシカトするに限る。

「なあ、さつきから呼んでんだけど」

知らん、知らん。

「おいってばあ」

その言葉とともにおれの顔のまん前に現れたのはおれと同じかちよつと下ぐらいの女子だった。

「ぎゃあっ」

悲鳴を上げた途端に頭を引っ叩かれた。

「失礼なやつちな。こんな絶世の美少女目の前にして何が「ぎゃあ」だよ、このドアホ」

恐ろしく口の悪い自称美少女がにんまりと笑いながら俺を見る。

オカマで豚でイタチ

「怖いのかよ、まさか」

「こ？」

怖いよ、絶対おまえ人じゃないもんつ。俺は心の中心で叫んでみた。

だっておまえ尻尾があるじゃんつ。そう思うがそこはそれ、おれにも男の意地つてもんがある。

「こ、怖いわけあるかよ、ばつかじゃねえ」

「バカとはなんだよ」

おれのハリボテの虚勢の言葉を聞いて、急に自称美少女の瞳孔が小さくなつて口が耳まで裂けていく。

「ぎゃああ」

つてこれなんだか前にもやったような展開……。

「失礼だと言ったよなあつ」

鮮やかなカウンターパンチがおれをマットに……いや、地べたに沈めた。

「うげつ」

いやもう美少女じゃなくて化け猫だよ、化け猫。……つてそうかおまえ。片方のほつぺたを地面につけたままおれは声を上げた。

「おまえ化け猫……なのか？」

「アホ」

「え？ 違うの？」

自称美少女はだんつと足を踏み鳴らして俺を睨むと一気に話し出す。

「俺さまは猫又つて言うんだ。そんじょそこの化け猫と一緒にするんじゃないつ」

どうだと言う顔で猫又はおれを見るが、そんじょそこの化け猫と猫又の格の違いなんておれには分からね。知ってたら変だろ、

逆に。

「あのさ、どう違うの？」

ここは素直におれは仁王立ちしている猫又に尋ねた。

おれの問いに、しゃあないなあと言いながら猫又は自分のスカートをめくって尻を探る。言っとくが絶世の美少女は人前でそんなことは絶対しないからなつ。俺の血の叫びなど知るはずもなく、猫又は何かを手前に持つてくる。そして、ほれと言いながら尻尾を両手で一本つつ持った。

ゆらゆらと意志があるみたいに握られた先が揺れている尻尾が確かに二本。

「尻尾が二本……？」

「そついうこと。これで分かつたら」

自慢げに両手で持った尻尾を振る猫又を前におれは「何で尻尾が二本ならすごいのが分らん」という根本的な質問をできないでいた。

とりあえず、すごいのだ。それでいいじゃん。格好いいよ、それ。じゃあ、おれは忙しいのでこれで……。

この作戦はどうだ。いやこれしかない。

「すごいな、格好良いよ、うん。じゃあおれ、忙しいから先行くね」

そつだ、こんなとこで足止めされてる場合じゃない。起き上つ

たおれに猫又が聞く。

「おい、おまえあの祠に行くつもりなんだろう？」

「え？ ああそつだけど」

だつてナスビ取りに行かなきゃ。そう思つたおれの肩を猫又の手が引き戻す。

「今日行くなら絶対俺さまを連れて行け」

なんでだよ、「冗談じゃないと手を振り払おうとするが猫又の手はがっしりと肩に食い込んで離れない。

「放せよつ」

「おまえ、死ぬぞ」

肩越しに耳元で囁かれた言葉におれは即死　　はしなかったが、
心臓が止まるくらいびっくりしたのは本当だ。

死ぬって？　ナスビ取りに行くだけでなんで死ななきゃならないんだよ。

「今晚はおまえどんな日か知ってるのか？」

猫又が手を腰にやってこつちを窺う。

「お盆ついていやあ、仏様が帰ってくるんだろ？」

猫又がばしつと小気味の良い音をさせたが、その音源はおれの頭だ。おれの頭をさつきから木魚みたいに叩きやがって。今まで覚えてた英語の単語が耳から出て行ったのは絶対このせいだ。

「これだから最近のガキは」

どこのおっさんの言葉だよと思うような呟きを漏らして猫又が天を仰ぐ。

かまふたつたち

「もう釜蓋朔日は過ぎてる。とつくに地獄の釜の蓋は開いておまえの先祖さまはお前ん家に帰って来てるんだよ、この不孝行者がっ」

「か、オカマで豚でイタチって何？」

ああ言わなきゃ良かったよ。瞬時に分かることがある。それが今だってもう猫又の顔を見ただけで分かった。じりと猫又が踏み出す。同じだけおれが後ろに後退する。

「……い、今のは冗談だからっ。おカマなんとかってなんでしょっか？」

今のは丁寧語になってる？　とりあえず「お」か「ご」を頭につけて、ですます言つとけばいいんじゃないやなかったっけ？　まさか自分があれば言葉づかい荒いんだからおれの言葉づかいにこだわらないよな。

そう心配しながらおれは猫又の目……は怖いので口元付近をちら見した。

「このあんぱんたんっ」

一喝されたが、意味が分らないのでこれは怖くない。

「地獄の釜の蓋って意味の釜蓋かまふた、盆が始まるのは本来は一日からだ。

その朔日ついたちで釜蓋朔日かまぶたついたちというんだ」

ここまではついて来てるんだろうなとさっそく先生気どりの猫又がおれを見た。

分かつてるぜ、先生。いつもの「分ってるから当てんじゃねえぞ」光線をおれが向けると猫又はふんと鼻を鳴らしたが話しを進めた。

この視線は塾では結構効果あると思ってたけど妖怪に対しても有効なのを今知った。知ったからって他に使い道があるわけじゃないんだけどさ。

「今日は先祖が帰る日なんだ。釜の蓋が閉まる日なんだぞ。ここらで蓋が空いてるのは今年のはあの祠なんだ。ただの人間がひよこひよこそこに行ってみる。巻き込まれておまえも一緒にあの世行きだ」猫又の話におれは知らないこととはいえ、命をかけた肝試しをしていたことになる。

「止める、止めるよ。教えてくれてサンキュー。おれ家に帰るわ」ナスビ一本と命を秤にかけられるかっていうんだ。踵を返したおれに「待てよ」と厳しい声がおれの足を止めた。

ナスビの救出

「おまえの家の先祖は乗り物が無くって帰るに帰れない。おまえらがお供えの、「精霊馬」（しょうりょううま）を持ち出したからな」

「しょうりょううま？」

「おまえらが三つの祠に昼間持って行ったら、割り箸を刺したナスビやキュウリを」

持って行ってた　けど。

「それはただのお供えじゃない。キュウリは馬だ。釜から出たときに家に帰るときに使う。早く家に帰れるようにな。だが、キュウリはもう使わない。」

今日は帰るときだから。ゆっくり帰ることができるようになるのは……」

「もしかしてナスビ？」

「もしかしくなくても、ナスビだ。牛になって先祖を運ぶはずだった」
嘘……そんな意味があるなんて。　ちっとも知らなかった。って

ことはおれがナスビを持って帰らなきゃ死んだ爺さんだか、婆さんだかはずっと家にいなきゃならないってことか？　でも、いってても何も感じなかったわけだしわざわざ帰らなくてもよくない？

「居たらまずいかな、やっぱ」

言った途端にスパーンと横っ面を張られた。　今回も迷いの無い、良い張り手です猫又サマ。

「このドアホ。今日中に戻れんとおまえの先祖は悪霊となっておまえの家に取り憑くんぞ。分かったら俺さまと行くのか、行かんのかはつきりしろ」

「……じゃいくよ」

「声が小さいっ」

「行つたらうじゃないかつ、ナスビがなんぼのもんじゃああいつ」
もう何に対してのシュプレヒコールなのかも疑問だが、こうして

おれの決死の肝試しが始まった。

暗さにも種類がある。歩きながらおれはそんなことを考えていた。懐中電灯の明かりが丸く照らす境界とそこから離れた場所。

闇の中にもう一つ闇があるかのような墨一色で塗りつぶされた空間。そこは音さえも迷い子になりそうな異界だった。

昼間に見える風景と夜に見る風景。同じ場所なのにそこはまったく違う空間のようであるで見覚えが無い。暗く足元がおぼつかないせいで距離感までおかしくなっていた。

「あれが祠だ」

前に行く猫又の声に向けて顔を向けると、そこに広がっていたのは信じられない光景で。小さな木造の祠。その観音開きの扉が全開になっている。そこから青白い光が間欠泉の噴出のように勢い良く溢れだしていた。

そこにいくつもの人影が次々と入って消えていく。

「おまえ、光に触れるなよ。引き込まれるぞ」

あまりの光景にその場に突っ立っていたおれの手が道の脇の低木の茂みにぐんと引つ張られた。

「なあ、近くにある祠は大丈夫なのか？」

おれは急に真や舞、正と權の兄弟のことが心配になってきた。

「ここら辺で蓋が開いたのはここだけだ。なあ、おまえに頼みがある」

「頼み？」

低木の茂みにしゃがみ込んで様子を窺っていたおれの横で猫又が言いにくそうにそう言った。

「なんだよ、頼みって？」

おれの問いに猫又はうんと言ったまま暫く無言だった。言うか、言うまいか。隣でそんな葛藤かっとうを繰り返しているらしいことが猫又の表情にありありと浮んでいて、おれは思わず嘖きそうになる。

「言ってみるよ、おれができることならやってやるよ」

「そ、そうか？」

ぱつと猫又の表情が明るくなった。　なんだかおれまで嬉しくなるような笑顔。　そんな顔を見ちゃうと手伝いなんてお安いことだと思ってしまうた。

「んじゃさ、俺さまが合い図したやつを呼びとめてくれ。釜に戻るうとする霊を止めるには人じゃないと無理なんだ」

頼みの言葉なのに『俺さま』と偉そうなのは気になるが、それよりそんな簡単なことを今まで悩んでいたなんて。

「いや、それ全然オツケーだけど」

おれの返事に盛大に息を吐き出した猫又は身を乗り出して祠に向かう人影をチエックしだした。　あんまり熱心に見ているからあんまり水は差したくない。

だけと言わなきゃならないことがある。

「付き合うのは夜明けまでだぞ。おれだって日が昇るまでにナスビ持って帰らねえと祖母ちゃん家が化け物屋敷になっちまうんだからな」

聞こえてるのが、いないのか。　猫又ははいはいと言うように二本の尻尾を揺らしたただけだった。

初めは誰が誰だか見分けがつかない影のように見えていたのに、猫又の隣で祠に入って行く霊たちを見ているとなんとなく顔つきが分かってくるから不思議だ。

「誰を待ってるのか、聞いてもいいか？」

「もう聞いているじゃないか」

まあそうなんだけどさ。

顔は道に向けたまま、猫又が「俺さまの飼い主」そうばつりと言った。

「そ、そっか……」

改めて猫又の横顔をまじまじと見てしまふ。　そうだよな、こいつは猫の妖怪だった。元は猫なんだ。

そこでちよつと疑問がわく。　一体どのくらい先祖って子孫のところに帰ってくるもんだらう？　ひい祖父ちゃん、祖母ちゃんくら

いならわかるが原始時代とかだったらどうなるのか。祖母ちゃん家はきつと霊魂ではんぱんだったはずだ。

だけど、猫が妖怪になっちゃうくらいの年月が経っているんだらう。

「なあ、死んだ人はいつまでこっちに帰って来るのかな？」

おれの問いに猫又は「覚えてる人がいるまでに決まってるだろ。

会いに来るんだ、ただ闇雲に帰ってくるわけじゃない」そう答えた。「じゃ、じゃあさ、猫又の飼い主って……」

もう帰って来てないかもしれない。そう思ったけど……言えなかった。

「なんだよ、途中で止めるな」

「う、うん……」

妖怪になるくらい飼い主を待っていた猫又の気持ちを考えると、おれはただ飼い主の姿を捜す後ろ姿を見ることしかできない。

っていつか、そうなるとおれは日の出までここに居なくちゃいけないのか？

「それはまずい」

おれは祠に目を向けた。扉の内側に祭壇があつてそこにはぽつんと割り箸が刺さったナスビがひっそりと置いてあつた。

手を伸ばせば、いけそうな気がした。ちよつとがんばればいける、そう思う。こっちの用をさっさと済まして猫又にぎりぎり付き合つてやればいい。

おれは四つん這いのまま後ろに下がって低木の茂みから這い出して、腰を低くしながら祠に向かった。細長い草が足にぴしぴしと当たって痒いがそんなことは言つてられない。

ぎりぎりまで近寄つて光に触れないように慎重に手を伸ばす。

もう少し、もう少しだ。紫のナスビに人差し指が触れる。あとちょっと……。

そこにぶわつとぬるい風がおれの頬を掠めた。

「なんだ、一体？」

一瞬、集中が途切れてしまう。はっと思った時には腕が霊体の一つに掴まれていた。恐ろしいほどの力でおれは祠の中に引っぱられる。

花柄でレース付き

それは言うなら、まるで飛行中の飛行機のドアが開いたみたいに体が気圧の違いによって飛ばされるくらいの強い力。

だけどそんなつ。このままこの中に入ってしまうってことは黄泉の世界に行ってしまうってことじゃないか。

嫌だ、そんなのつ。冗談じゃないつ。

咄嗟に掴んだ祠の扉にしがみつく。　だけどそんなには持ちそうにない。

「猫又つ！　助けてつ！　猫又つ」

おれの必死の叫びに今まで大人しく列を作っていた靈魂たちの様子が変わっていく。半透明のトレーシングペーパーに描かれたようだったのに、実体の色が見る間に彩色されていく。

「手に掴れつ。片方の手をそこから放せつ」

飛びこむように跳躍してきた猫又が手を伸ばす。その手を掴もうと思っているのに、今にも吸い込まれそうな力におれは怖くて手が放せない。

指が硬直したみたいに硬くなっている。

「できないつ。どうしたらいい？」

おれの悲鳴混じりの声に猫又は大きく舌打ちして二本の尻尾を腕のように俺の脇の下に潜らせた。

「おまえ名前なんだ？」

今それ聞きますか？

「た、孝之つ。丘野　孝之つ」

「手を放せ、孝之。目を閉じてこちらに跳べ」

飛ぶ？　嘘だろ？　普通の人間はアニメの世界ほど運動神経がいいわけじゃない。映画やアニメのようなアクションをやるうとしたら百人中九十九人が死んでるはずだ。

「このアホんだらつ、早く跳ばんかいつ、このどアホがつ」

容赦ない猫又の声で霊たちのざわめきが大きくなった。どんどんとたくさんの腕が伸びてくる。早くしないとこいつらに引きずり込まれる。おれは蠢いている霊の頭を足がかりに決死の覚悟で手を放して跳び上がった。

アニメのように。映画のように。神様、お願いっ。

しかし当然華麗に何メートルも不安定な場所で跳び上がれるはずも無く。

現実には、墜ちる寸前に猫又の腕と尻尾に助けられたというお粗末な結末。いや、助けられたのか？

草の上に引きずり戻された途端におれの言葉は途切れてしまう。

「あ、ありが……っ痛えっ」

「この腐れガキがっ」

たっぷりと力ののったパンチがおれの頬に飛び、おれは踏ん張り切れずに尻もちをついた。猫パンチってこんなんだったか？

世の中の猫耳フアンのおタクたちよ。ほんとの猫耳女はこんなに恐ろしいバンタム級もびっくりのパンチを打つんだぞ。

「ニャンニャン」なんて可愛く言ったりしないんだと知ってるか？

この問答無用の暴力におれは抗議した。

「何しやがるっ、痛えじゃねえかよ」

「当たり前だ、痛いようにやったんだからな」

なんだよ、おれはただ。猫又のために……そう思ったことは本ただけど、いちいち言うのもなんだか言い訳っぽくて話せなかった。

「ごめん」

一人で勝手なことしたのはやっぱおれが悪い。そう思って謝罪すると「ちっ」という大きな舌打ちが聞こえた。

「仕方ない、おまえのナス取ってきてやる。その代わり俺さまの飼い主が現れたらちゃんと声かけろよ」

「あ、ああ」

返事をしたのはいいが猫又の飼い主ってこっちにはもう帰って無

いんじゃない？ よしんば帰っていたとしてもおれは顔知らない。

「どんな人が知らないんだけど」

「俺さまの飼主は良い奴だった。優しくて頭を触る手がぬくくて気持ちの良い声だった」

「ちよっ、ちよっと待て。」

「そんなことで分るわけないだろ。知りたいのは外見だ、外見」

「外見……」

そこで猫又が凶悪な顔でおれを見た……？ いや、もしかしてこれは困っている顔なのか？ まさか、まさかとは思うが……。

「おまえさ、まさか」

「顔は覚えてない」

「うっそっ。どうすんだよ、おい。そう思っているおれの横で猫又は「くっそ」と言いながら地面を蹴りつけた。」

「やっぱり外見って必要かな」

「必要に決まってんじゃないよ。」

「どうやって探すんだよ」

「フイーリング？」

言葉の最後にはてなをつけてんじゃないねえっ。こいつは大変なことになった。頭を抱えるおれの前でぐんと前傾姿勢になった猫又が勢いよく祠に走り込んで行く。

「猫又っ」

眩しい光の中、たくさんの手がそれに反応して掴みかかってくる。おれは見ていられなくて猫又の後を追った。

「来るなっ」

吐き捨てるように猫又はそう言うとなスを掴んで開いた祠の扉を両足で蹴るとくると宙返りして光から逃れた。

それはもう見事と言うしかない。あっと言う間の出来事だった。さすがは猫というべきか。しかしくると回った時ににパンツが丸見えになっていたことは黙っておこうとおれは思った。

レースがついたラブリーな花柄だったですが……これは、ひっそ

りとおれの心のライブラリーに入れとくことにした。猫又に言うて何されるか試すようなスリルを楽しみたいわけじゃない。

「こいつは先に家に返そう」

猫又の言葉におれはえつと動きが止まる。そんなことしてたらいるかもしれない飼い主に会えないかもしれないじゃないか。

「だけど家まで戻ってたらさあ……」

「家まで戻るのはいつだけだ」

へ？ 文字通り固まったおれの前で猫又はナスに話しかけていた。

「おまえ、こいつの連れと一緒に家に帰れ」

おいおい、何言ってるの？ いくらなんでもナスビは返事しないだろ……。そういうのちよつと痛いんですが……。

ところが、ところがだよ。ナスビは返事をするみたいに頷くと地べたに降ろされた途端に割り箸を交互に動かしてよたよたと歩き出したではないか。

「うそ……」

うそ じゃないかもしれないけど、このナスビが「一緒に帰ろうぜ」って言うて果たして真たちが仲良く受け入れるとは思えない。

ぴんときたら・・・

「あのさ、これって無理あるよな」

「何で？」

「だって、こいつナスビだぜ」

「そんな事知ってる」

「だったら……」。

「あのさ、このままな訳ないだろ。もう少し見てろマヌケ」

「マヌケって」

言い返そうとしたおれの視線の前でナスビの姿は身知ったものに変わった。前髪が長めのちよつと猫背で足を引きずって歩く癖おれだ。いつも母親に注意されていたが、やっぱ変だ。人の意見は素直に聞いたほうがいいとおれはちよつと反省つてもんをした。

「つか、なんでおれ？」

「おれじゃん」

「おまえだよ」

なんで？ そんな気持ち顔に出ちゃってたのか、猫又は「めんどくさい」そう言いながらも説明してくれた。

「これから朝までここにいろんだろ？ だったら戻って来なかったら連れが騒ぐじゃないか。だからナスビに頼んだ。それにナスビは一人じゃ家に帰れないからな。人についてもらうってことで、一石二鳥なんだ。了解？」

「りよ、りよーかい」

ひよこひよこ歩いていくおれ、もといおれの格好したナスビを見ながらみんなおれだと思つて仲良く家に帰るのかなと寂しくなつた。おれよりナスビのほうと話しが合ったりしたらへこむ。いや、ばれて欲しいわけじゃないけど。

「って、なんでおれナスビ相手にこんなにたそがれてんだ？」

「おい、何たそがれてんだ」

猫又にそう言われてやつぱりたそがれていたんだとまた落ち込んだ。だが、このまま落ち込んでいる場合じゃないよな。

「見つけようぜ、飼い主」

おれの言葉に猫又がうんと返事を返して笑顔になった。うえっ、なんだよそれ。普通の女の子みたいじゃないか。急になんだか顔が熱くなってしまう。

「おまえ、猫又のくせになんだよ今の。気色悪っ」

「うるさいっ。猫又のくせにはなんだっ、孝之のくせに」

「なんだとおっ」

大声を出してみたが、孝之のくせに　　どういう意味だ？　べつにおれは孝之なんだからいいじゃん。

いや、良くない？　そんなことを考えていたら後ろ頭をぽかんと猫又に叩かれた。

「これでおまえの心配ごとはなくなった。気合入れて見るよっ」

「う、うん」

答えては見たものの、フィーリングだぜ、フィーリング。　どうしたらいいのかおれは途方にくれた。

どんどんと行き過ぎて行く仏さんの行列の中にピンとくる人も、知り合いもないまま時間だけが過ぎていった。

「なあ、おまえ飼い主探すのってどれくらいやってるわけ？」

おれの問いに猫又は「初めてだ」と応えた。

「初めて？」

なぜなんだ？　もつと早くから探していたらとっくに見つかっていたかもしれないのに。

「なんだよ」

「いや、何でも」

ぶすつとした顔で猫又は小さい子がするみたいに膝を抱えた。膝がしらを持つ両手に筋が立っていて、何かに耐えているみたいにおれは感じた。

「言いたくなかったらいいけどさ。何か理由とかあんの？」

「別に」

「本当に？」

「しつこいっ」

いでっ！　かわす暇も無いほどの華麗な右フック。　身体の回転を上手く使った良い攻撃だ……　なんて、解説にでも徹しないと反撃したくなるようなパンチにおれは頬を押えた。

暴力女。　いや、暴力猫？　いやいや暴力ばかりの化け猫め。

もう絶対可哀そうとか思わないからなっ。　くそっ。　そう思ったおれはふんと視線を祠に向ける。

それからはずっと無言だった。　霊たちは音を立てない。　だから聞えてくるのは虫の鳴く声や牛ガエルの低い脅すみたいな声しかない。　祠から漏れる光しか光源は無くて。

ここで生きているのはおれだけなんだとふと思った。　あ……妖怪って生きてる？　良く分らない。

妖怪になるって何かきっかけはあるんだろうか。　猫だって飼主主に可愛がられて死んだのなら成仏するんだろうに。

ま、どうでもいいけどさ。　自分にそう言い聞かせておれは目の前の物に意識を集中しようとする。

だけど、何を見ればいいのかも分らない状態じゃ緊張感なんて続かない。

草の青臭い匂いがやけに鼻につく。　丑三つ時って何時のことだったろう？　人間以外の生きものや魑魅魍魎ちみもつりょうが勢いづく時間。　それが今　そんな気がした。

「なんだ、あれ……」

黒く蠢くうごめものが霊たちの後を歩いて来る。　夜の闇よりもなお黒い。　夜に溶け込みそうな色のくせして、あまりの禍々しさに目を逸らせない。　そんなものが……。　ときどきしながらそれを見ていると黒いものがぐぐつと体を伸ばした。

あっと思う間も無く前を進んでいた霊を飲み込んでそれは蠕動運

動するみたいに上下左右に触手を動かしている。逃げなきゃば
いって。猫又到そう言おつとして横を見ると、猫又の目がきらり
と光っていた。

終わらない受難と楽しい毎日

「見つけた」

立ち上がった猫又の言葉に俺は驚く。

「見つけたって……あれ？」

うんと猫又は俺を見た。

いや、できない。ふつうできないだろう。あいつ、今霊を喰

ったんだぞ。そいつを俺が呼びとめる？ できるはずない。

っていうか、優しいおまえの飼い主って……人間じゃなかったのか？

「な、なんて言って呼びとめるんだよ……って、無理だから」

「しなきゃ全部喰われてしまう。注意をこっちに向けるだけでいい。後は俺さまに任せろ」

って、どういうことだ？ おまえのやりたいことって？

「おまえの目的って優しい飼い主に会いたいっていうことだったんじゃないのかよ」

「違うっ、俺さまの目的は悪霊と化した飼い主の粛清だ」

粛清？ って……。

「ぎりぎりまで待てよ。祠の間際まで来たら何でもいいから声をかけろ」

ターゲットの方から目を離さず、猫又はじりじりと祠に近づく。

尻尾がぴんと立ち上がって細かく震えていた。

「それでいいのか？」

「俺さまが妖怪になったのはこの枷があったからだ。俺さまは飼い主の怨念の血に浸り、飼い主に殺された。悪霊となった飼い主を粛清して俺さまの役割は終る」

うそ……。こんな大変な役目だったのか？ いやいよ先に帰ったナスビが羨ましくなったおれだった。

「俺さまが合い図したら行けよ、孝之」

「お、おう」

声が半分裏返ってしまふ。仕方ないよな、おれはただの中学生なんだから。冠をつければ『受験生』。母親は人に会うたびに「家の子が受験生で大変なのよ」と愚痴り、相手は『あら大変だわ』と返すこの頃。

大変なのはあんたじゃなくておれなんだけど　そんな事を言ったら瞬殺されそうで言えない。

この世で最強最悪なのは母親じゃないかところそり思っていたおれだが……。

『母ちゃんごめん。最悪で最強は今日の前にいます』

次々と前をいく霊を飲み込んで大きくなりながら悪霊は祠に近づいて行つた。

そして、

「今だ、行けっ」猫又の声がした。

最悪な時間の始まりだった。

萎えそうになる足を叱咤しながら、おれは走った。祠に触手を伸ばした悪霊に向かって声を張り上げる。

「す、すみませ〜ん」

いや、待ってくれ。何言ってるんだとか思つのはおれだって分かつてる。けどさ、他に何て言う？

気の抜けた炭酸水みたいなおれの呼びかけは当然無視されると思つたが、幸か不幸か悪霊の動きを止めた。

そしてそれは振り返つた　ような気がした。

もこもこと体が蠢いてこちらに進路を変えるのを見ておれは総毛立った。唾を飲むのって今までどうやってた？　そう思うくらい意識して口に溜まつた唾を飲み込む。

逃げなきゃと思うのに膝から下に力が入らない。まるで他人のもののよう膝が笑う。

「くそっ、動け。動けよ、足」

見た目はのっそり動いて見えるくせにそいつは案外早かった。

気が付くとおれのすぐ前にそいつは　悪霊は立っていた。

ぐわっとそいつは口を開ける。　たちまち魚が腐ったような匂いが広がり、おれは「うげっ」と口を押えてしゃがみ込んだ。

この場合、しゃがみ込むなんて最悪の行動パターンだろう。　おれだって映画やマンガを見ていたら「ばっかじゃねえ？」とポテチを齧りながら言ったと思う。

だけど俺は所詮過保護に育った都会っ子だ。　臭い匂いなんて我慢できない。　命の危険よりまず匂いに反応するあたり、日本人は平和ボケしているという指摘は当たっている。

もうダメか……　そう観念したおれの頭がどかっと踏まれた。　こんな酷い目は小学六年の時の運動会で組体操のピラミッドの土台になった時以来だ。

「痛ててっ」

上を見上げたおれが見た物は……猫又のパンツだった。　どうやらおれの頭を踏み台に使ったらしい。

「靈寶天尊・安慰身形・弟子魂魄・五臟玄明・青龍白虎・隊仗紛紜・朱雀玄武・侍衛我身・急急如律令、我の手により滅失せよ」

耳がきんとなるほどの大声が響き、猫又が腕を刀のように振りあげると上段から一気良に降り下ろした。

実体の無い闇　に見えていた悪霊の肉を断ちきる音が生々しく聞こえる。　ずぶずぶと切りこむほどに筋や腱が断ち切れるぶちんという音が大きく響き、「おおおお……」というおぞましい悪霊の断末魔がおれの耳を支配した。

この先何年もおれはこの音を繰り返し夢で聞くことになりそうだ。　「ありがとう、孝之。これで俺さまも成仏できる」

突然消えた悪霊に啞然とする俺に猫又がゆっくりとほほ笑んだ。

「え？　これで終わり？」

良かったよな、うん。　普通の猫みたいに成仏できるんなら。　たださ、ただどおれ、なんか寂しくて。

「猫又行くなよっ」

「何言つてんだ。ここでさよならするのが一番いいに決まってる。ほら、身体も薄くなっているだろう？」

そうなのか？ 言っちゃだめだと思いながら俺は猫又を見つめた。結構長いこと。

「あのさ、全然変わってないぞ」

「へ？ うそ」

慌てて自分を見下ろした猫又は「げっ」と唸った。

「なんかどこかで失敗したみたいだ」

頭をがりがりと掻きながら猫又はにへらと笑った。涙の別れのはずがそうならなかったのでバツが悪いらしい。

「えっと、一件落着でおれは家に帰るけど……猫又はどうする？」

んん……と一応考えるフリをしてから猫又はおれを見て笑った。何かやな笑いだ。何か企んでいそうな笑みにおれの眉間に皺が寄る。

「ペットいらないか、孝之。俺さま猫の姿になると超キュートだぞ」
ええええええ？

おれの受難は去ったわけじゃ無かった。足元で体を擦りつけてくる尻尾が二本ある黒猫を見ながらおれは盛大にため息をついた。

家に帰り、「ご飯の面倒も下の世話も全部おれがします」という悲しい決意表明の元、猫又は今おれん家の猫になっている。

おれのベッドの半分を占領して丸まっている姿はこの家猫とも変わらない。尻尾が二本あるのが不気味だが親は「そこが可愛いよねえ、チョコちゃんは」とか言ってる。

黒猫だからチョコ。まったく似合わない名前を付けられたものだ。しかし猫又ときたら「チョコちゃん」と呼ばれると「にやああ」とどっから声出してんだというほど可愛い声で鳴いてみせている。

だが一旦おれの部屋に帰るとどうだ。ベッドの上にぴょんと跳

び乗り居場所を確保すると「孝之つ」苛ついた声でおれを呼ぶ。

「おまえの母親、遠慮なく触り過ぎだ。禿げになったらどーする。注意しとけよ」

偉そうな態度に豹変だ。

こいつがいるせいで厄介事に巻き込まれるはめになること数回。

それでも結構楽しく暮らしているとおれは思う。 恐ろしくて楽しいペットのいる生活もまんざら悪くない。

だけど、

その話は長くなるのでまたの機会に 。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1631v/>

猫又と俺

2011年7月31日03時16分発行